
ある男の転生物語 （ネタ）

夢追い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある男の転生物語（ネタ）

【Nコード】

N3247Y

【作者名】

夢追い人

【あらすじ】

思いついたネタを載せていききたいと思っています。
色々な世界で転生します。

現在載せているもの：シーキューブのワースに転生。リリカルなのはのキャラの妹に転生。

てきにのろわれてしまった！（前書き）

前から書いてみたかった作品のネタを思いついたので、書いてみました。

プロローグみたいなものと思ってください。

10 / 15 少し加筆修正しました。

てきにのろわれてしまった！

物語は、ある日夜知春亮という少年が父親から、一方一メートルの黒い立方体を受け取ったことから始まった

いつもの父親の病気だと考え、彼は疲れた様子の宅配業者から荷物を受け取った

この時点で、自分の父親をある意味信じている彼は、その荷物が決して普通ではないと判断している。宅配業者が帰ると、彼は継ぎ目を指でなぞったり、中に指を入れて弄りながら、どこからともなく聞こえてくる声を幻聴だと決めて検分していた

そんな時に、僕はハルにいつものちよつとした頼みごとをしようと訪れた

「ハル、ちよつといいかな？ 今日もあそこで・・・」

「うん？ 守人また来たのか。いいかげんちゃんと「ああ、お邪魔しちゃったね。」・・・は？」

「ごめんね？ お邪魔ものはさっさと退散するよ。また今度頼みに来るから」

そう言つて僕は足早に去つて行つた

そう、僕は見なかった

ハルが女の子を真昼間から襲っているなんて見たくはなかった
いや、嘘です。カメラがあればよかったのに！ きつとこのちゃんがおもしろい反応をしてくれる！ なんて惜しいことをしてしまつたんだ！

僕は自分の間の悪さやカメラを常備していなかったことを悔やみ
つつ、与えられた自室に帰って寝た

そして、夜のことである。疲れて寝てしまっていたハルがその重さに耐えながら運びいれた張本人が、暗い家の中を彷徨っていた。台所に辿りついたその誰かは食べ物は無いかと探し、それを見つけて食べるのに夢中となっていた

寝ていたハルは目をさまし、食事の用意をしようとしたのだおうが、その音に気付いた。カリカリパリパリというわけのわからない音に

心当たりのモノに当てはめているが、一人については部屋の光がついていたので除外し、あいつ（僕）はそんな奴じゃないと考えてまた候補から外れる

となると、泥棒か！ と考えたハルは慎重に行動し、息を殺して台所の中を観察する。泥棒ならすぐさま110番に連絡しようと考えていた彼の視線の先にいたのは・・・

白銀の全裸煎餅泥棒少女でした

ハルと少女は驚愕してお互い顔を見合わせ、今度は少女が叫びました

「ほわ・・・さ、先程のハレンチ男！」

煎餅泥棒の少女は自分の恰好に気づくと手当たり次第にハル（彼女から見て、ハレンチ男）に素晴らしいコントロールで投げつけ、何とか手元に残した二枚の煎餅で体を隠なり、彼女は寄るな！ と言うつと、ハルに決定的な一言を叫びました

「・・・・・・・・の、呪うぞっ！」

ハルはその時になって、やっと理解しました
あの箱は彼女であり、呪われている道具であるということを

僕が昼寝（昼のことからの現実逃避）から起きたら夜になっていたため、ハルに何か食べ物がないかと聞きに行くと、「豆腐」だの「煎餅」といった言葉が聞こえてきたばかりか、「服を貸して・・・」「指を入れて弄り回し・・・」と聞こえてきた僕はとうとうハルが知らない間に大人になったと勘違いし、いつもの食事をとっている部屋に突貫した

「ハル！　とうとう大人の階段登っちゃったの！？　今日は赤飯だね！」

バシーン！と襖を開け放った僕が見たのは、秋刀魚を箸で解していたハルと、距離を取ってハルを警戒していた見たことのない白銀の髪の彼女だった・・・

「あれは何だ！？」「彼女とはどういった関係だ（笑）！？」「大人しく飯食えー！！」と、ちょっとした騒ぎはおきたものの何とか落ち着き、僕を警戒する彼女に話を聞くためにハルが話を切り出す

「そっぴやお前、名前は？」

「え？　ハル、知らない女の子と・・・」

「いや、だから違うからな？　で、名前は？」
「ふいあ・・・」

彼女はそのことについて話す気はなかったようで、眉を寄せ、口を閉ざす

「フィア、か？」

「（フィア、ね？）」

ハルは聞き返すが、彼女　フィア（仮）は自分のことはどうでもいいと言つて、警戒していた対象である僕の方を向いた

「赤いの、お前は何だ？」

「僕は盾^{たてなし}為^{もりと}守人。ここ、夜知家でお世話になっているんだ。よろしくね？　察しているように君と同じく呪われたモノで、盾だよ。世の中、何があるかわからないよね」

まさか無機物になるとは・・・

誰にも聞こえない程度の声でボソツとつぶやいていると、彼女はとりあえず納得したのか警戒が弱まった。そこで、ハルは本題を切り出す

「結局、お前って何？　どついう箱なんだ？」

「う・・・」

「う？」

フィアに聞き返す。すると、何の前触れもなく眉を吊り上げ、怒り出した。怒りの煽りをくらった秋刀魚がフォークでメッタ刺しに

される

「うるさい！ お、お前たちに関係ないわ！ あほー！」

「（ああ、秋刀魚が！）」

「うわ、何だ？ そんなストレートな罵り方久しぶりに聞いたぞ！
？ 子供か！」

「な、なにおう！」

秋刀魚を口から吹き出しながら彼女は言い放った。ハルが注意して口を閉じるように言うが、彼女は聞き入れず、

「まったく・・・女の過去を根掘り葉掘り聞くとはい。ハレンチ小僧め！」

と断定された

話が進まないため、何とか耐えたハル（ハレンチ小僧）は、大人になれ、と自分に言い聞かせながら折れることにしたようだ

「ふう・・・ま、お前らの過去が基本的にあんまり楽しくないことだったのは俺も知ってるからな。怒らせてまで聞くつもりはないよ」

こいつはそうじゃないみたいだな・・・

ハルが隣にいる僕を見るが、僕は呑気にご飯を食べ続ける

フィアはハルの言葉に毒気を抜かれたようで、ゆっくりと怒りを消して下を向く

「あの姿は、嫌いだ。できれば・・・あまりなりたくはない。」

その言葉に僕は「ああ、この子もそうだったんだな」と思った

むしろ僕の場合がおかしいのだろう。いや、あきらかにおかしい。あれ（転生？ むしろ憑依？）とか、それ（自分はこの世界以外にもいる）とか・・・

そんなあれこれ考え始めた僕を置いて話は進む

「崩夏ほなつとか言ったな。お前は奴の息子か？」

「そつだよ。春亮だ。親父、今どうしてた？」

「知らん。まだ向こうでやることがあるとか言っていた」

「相変わらず自由人すぎるぞ、馬鹿親父め・・・」

「本当に凄まじいね。何の仕事してるんだろね？」

「さあな。生活費の振込を忘れん限りは放置プレイって感じた」

その言葉に僕は苦笑いする。家族で実の父親である崩夏さんをあ意味信用しているのは分かるが、少しは心配してあげてもいいのにそんな僕たちを見たファイアが、

「お前といい奴といい、その、妙だな。普通の人間は、私やそいつのようなモノを理解などしないと思っていた。」

「この家は昔からお前らみたいなん受け入れてやってきたって話だな。まあ基本は大したことないチヨイ呪われの道具なんだが、たまにお前みたいにぶっ飛んだ奴も来る」

こいつもな、と僕を指す。一度静かになるが、ファイアが何かを決めたように長く息を吐き、フォークを置いて姿勢を正す。その目は真剣にハルに向けられていた

ファイアは前置きをして、話し始め、自分の望みをハルに告げるすなわち、呪いを解きたいと・・・

この世界では魔法が広まっていたり、超能力や超科学が発展しているわけでもなく、人間やめてるだろとか言うような人物がいたりはない（いや、僕が知らないだけで探せば案外いるかもしれないが・・・）

この世界で中心となるのは呪いだ

人が人を呪うのではない。人が道具を呪うのだ

呪われ続けることで、その道具は変質する。周囲や持ち主にまで悪影響を及ぼし、力を得る。呪いが、あるいは願いが具現化する

それは諸刃の剣だ。そうなった道具を使えばほとんどの場合、相手に更なる効果を発揮するが、使用者は蝕まれる

道具に

呪いに

そして、ヒトに呪われ続ければ、道具はヒトの性質を得る。魂を宿し、思考するようになり、人の姿に化けることも可能となる

「そうだ。始まりは人の呪い。私というモノは人を害し、憎悪に怨嗟に殺意、あらゆる負の感情を受け続けることで・・・呪われた。所有者を狂わせる」という忌まわしい呪いだ」

フィアは呪いを、己を嫌っているようだ

ハルは何か疑問に思っているようだが、黙って話を聞いていた。

僕は結構ありがちな呪いだなと思っていた。某ゲームの皆殺しにする剣とかを連想させる呪いだ

独白は続く

「そうなくてもまだ終わらない。ヒトの curse！カース！呪いカース！それは私にヒトの性質すら塗擦し、そして、ただの道具だったはずの私は意志を持った」

否、持たされたのだ

意志を持たない呪具を無知で幸せだと言い、ファイアは自分がここに来た目的　呪いを解くことが本当にできるのかをハルに聞く。

「所有者がお前なら、誤魔化すと危険だぞ」と

それに対するハルの答えは簡潔だ

「うん、できるぞ」

「・・・ほあ？」

「（あ、かわいい・・・）」

そこからは空気が弛緩した

ハルがファイアに「自分は呪いを受けない」「この土地は清浄な力の中心で、負の性質は減っていく」「正の思念を受ければ中和される」など説明する。その説明の中に崩夏さんが靈感や特殊能力を持っていると聞いて、ビックリするどころか納得してしまったのは仕方がない

僕はそれを目にしたことはなかったが、そんな人だからこそ僕たちを見つけたら、家に住ませたり、変な組織と渡り合っているのだろう

僕はシリアスなのが終わつたと、食事の続きに戻る。秋刀魚が美味い

ハルとファイアが話し終わると、食事が再開される

ファイアがズタズタの秋刀魚を食べていると僕に気づき、話しかけてきた

「赤いのも呪いを解くためにいるのか？」

「名前で呼んでくれるとありがたいんだけど・・・。僕も崩夏さんに誘われて送られてきた口だけど、正直目的は特にないんだ。」

「なら何故ここに来たのだ？」

「面白そうだから、というのもあるけど、日本には来たかったからね。ちょうどよかったのさ。向こうにいても誰も飾ってすらくれなかったしね」

「呪われたものを飾る馬鹿はおるまい」

「いや、呪いうんぬんじゃなくて、見た目がね・・・見る？」

「ちよつと待て、あれは食事時に見るモノじゃないだろ！」

「ぬ、気になる。見せろー！」

「あはははは。じゃあハルには悪いけど、新入りさんにお披露目しよう！ あ、気をしっかり持ってね？」

「は？」

そう言っただけは立ち上がり、ファイアの期待に応える。ハルは諦めて嘆息し、ファイアが期待と疑問の視線を僕に向ける

「僕は盾。戦場で敵の攻撃を集中させ、あらゆるものから持ち主を守り、味方への被害を防ぎ続けたために敵に恐れられて呪われ、味方に畏れられて伝説として語り継がれた防具！その姿は・・・」

変身、いや元の姿に戻る

大きい、それは人の全長を覆い隠さんとする大きな盾であった。禍々しく、ハートのような形をし、上に二本、側面に四本ずつ棘がある。大きな見開かれた目が特徴の、それは仮面と言っていい造形の盾だった。

「これが、（自称）ムジユラの盾だー！！」

僕はこの日、初めて「にやわー！」と驚かれた。

てきにのろわれてしまった！（後書き）

ありがとうございました。

下記に今のところ考えている設定を書いてみました。

・盾たてなし為もりと守人

盾：ムジラの仮面のような禍々しい大きな盾。かなりの筋力が必要とされるだろう、体を覆い尽くしそうなほど大きい。

見た目は敵の攻撃を自分に集中させるために派手に作られた。味方を守るため、自分に攻撃を集中させたいという騎士の願いに答えた職人が、悪ふざけ以外の何物でもないと思われる見た目に反する最高品質の盾を造った。盾にはいくつか暗器や剣といった武器を収める機能までついたそうだ。

その盾は数々の戦場で使われ続けた上に、戦場に出るたび補修されていたので傷一つないまま戦場に現れた。剣を槍を斧を矢を、時には破城鎚や銃弾といったあらゆる攻撃、強風や落雷（嘘か本当かわからない）といった現象さえも防ぎ、怨嗟さえも自分が受け止めて持ち主を守り続け、味方に敵に反撃させる切っ掛けをつくり、時には見た目に怯えさせて多くの敵に分かりやすい対象として呪われ、恨まれ、伝説として語り継がれた。

戦闘中、自分が味方や守る対照の前にいる限り敵の攻撃は自分より後ろに届かない効果と、相手にプレッシャーを与える効果（個人差があります）、攻撃を防がれると何かしらの（小さいか大きいかは関係なく）隙ができてしまう効果がある。

隠し設定：不滅で、不朽で、不動。つまり、壊れない、朽ちない、持ち主を裏切れない。とつくの昔に狂ってる。

持ち主への呪いは、味方と思っているものを過剰に助けたがるようになり、敵に容赦がなくなっていく。そして、使うごとに存在を食われていく。

身長は低め、赤髪で、目つきが鋭く、体には無数の傷がうつすら見える。見た目は東洋人（元の魂に引かれて）であり、顔は悪くない筈だが、きれいに整っている分妙に怖さが増している。

敵でなければ優しい。暴力反対（ほとんど口だけ）。子供っぽい。夜知の家に来たのは父親に見つかって話を聞いて面白そうだったから。呪いを解くのにあまり積極的ではない（勲章みたなものだと思っている）。無機物に転生するとは思わなかったが、割と楽しんで生きていた。

ちよつとM（いや、かなりM）。

ファイアがくるまで一番最近の新入りだった。よく物置で他の呪われているモノと寝ている（自分が何なのか忘れないためであるが、春亮は人間らしい生活をして欲しい）。

てきにのろわれてしまった！ 2 度目

僕のビツクリ正体を見せた後、再び食事を再開した夜知家にチャイムの音が鳴る

聞きなれないのかフィアが小さく身を跳ね、ハルが玄関へでいき、夜に尋ねてきたお客人を迎えた

「こんばんは、春亮くん」

そこにはこのちゃん 村正このはがエプロンを着けて両手に鍋を持っていた

このちゃんは顔の左右で茶髪を三つ編みにしており、丸眼鏡をかけたお姉さんである。相変わらず昔の日本で生まれたとは思えないけしからん体を持っている

どうやら得意の肉料理をおすそ分けしにきたようだ。ちょうど食事中だし、フィアのことこのちゃんに紹介しようとハルが話しかける

「そうだ、丁度いい。お前にも話というか協力を・・・」

「おい、春亮。少々足りんぞ。もちよつと何かないのか？ 第一希望はせんべとやらだが・・・」

フィアが居間から玄関へとやってきた

ハルが居間を出て行った後も僕とフィアは食事を続けていたが、あつという間に食べ終わってしまった。その後、フィアは物足りなさそうにして部屋を出て行ったと思えば、どうやらハルにご飯の追加を強請るためらしい

「食うのはえよ！」

ハルのツツコミが居間でのおんびり座っている僕にまで聞こえてくる何故かその後、フィアとこのちゃんが初対面で喧嘩を始めたようだ。玄関から怒りの気配が漂い、時に増幅されている。きっとその中心にいるハルはさぞ居心地が悪いだろう

「どれだけ相性が悪いんだよ……」

僕は苦笑しながらそう呟くが、緊迫した雰囲気は玄関には決して届かない。無論、届かせる気もない

女の喧嘩はこわいのだ

男は黙って決着するのを待つべし。間に入っていくのはフラグを立てにいく人（エロゲとかの主人公）が相当なお人好しだけでいいそんな第一次夜知家大戦（能力的に考えると誇張ではないだろう）もいつの間にか停戦したようで、誰かが居間へと向かってきた

「ん？ あ、このちゃん。こんばんは」

「こんばんは。守人くんも今日は食事してたんですね？」

「まあ、僕も人型を持つ身だからね。どうしても食べなくなるんだよ」

そう言って苦笑するも、このちゃんは困ったように眉を寄せる。ヒトでもなくモノでもない、中途半端な生き方をしている僕を見て何か思うところがあるのだろう

中に入って座るように勧めると、手にしていた鍋を机に置いて空いた場所に座る

「・・・・・・・・なんで鍋に取っ手が無いの？」

「あ、これは、その・・・」

「ふん、そのウシチチ女が壊したのだ」

どうやらフィアが戻ってきたようだ。その様子はなにやら邪悪である

「ウシ・・・!？」

「ああ、このちゃんってスタイルいい（巨乳だ）もんね」

このちゃんはフィアの言葉に顔を引き攣らせ、僕はこのちゃんの方を向いてその呼称に納得する。そんな僕をこのちゃんが高速で僕を睨みつけてきたが、その顔は赤い

「守人くん？」

「待った待った。このちゃん斬れやすいんだからあんまりキレちゃだめだよ？」

「大丈夫、守人くん斬れないじゃないですか」

右手を手刀に構えて笑顔で迫られると、いくら斬れないとはいえ、その切れ味を多少は知っているだけに少し怖い

「ほほう、性格が悪い上にキレやすいとはどうしようもないな」

フィアのその言葉にピクツと反応するが、フィアの方は向かず、笑顔のままである

ただ、向かい合っている僕にはさつきよりも怒っているのは丸分かりだ。空気が重くなっただし、青筋が浮かびそうだ

「・・・・・・・・このちゃん？」

「気にしませんよ？ 子供の言うことですしね。全く、色々小さいからって僻んでるんですかね」

「な、なにおう！？」

先程玄関で感じたように空気が緊迫し、両者の怒りの感情が増大している。玄関では口だけだったようだが、今度は得物を持ちだしそうだ。ここで喧嘩されても（僕が）困る

内心ため息を吐きたくなるが、茶を啜り、

「そこまでにしときなよ。二人ともキレイでかわいいんだから怒ってるよりも笑顔の方が似合うよ」

歯の浮きそうなベタベタなセリフを言うと空気が弛緩した。二人は褒められて悪い気はしないのか、顔を少し赤らめながらそっぽを向く。このちゃん顔は顔を赤くしたまま僕をじとっつと見てきたが、にっこり笑ってあげた

そんな時に、ハルが炒め物の大皿と一人前のごはんと味噌汁をもって居間へ戻ってきた

「ありあわせなんだが、こんなもんでいいか？」

「全然オツケーですよ。」

他の皆の食事が再開された時、このちゃんがもってきた鍋が開けられた。中身は美味しそうな肉じゃがである。ただし、およそ肉：じゃが＝8：2である。

「その……………どうですかね？」

「う・・・おほん。いつも通り美味そうでいいんじゃないか？」

そう、いつも通りである。このちゃんは肉食なのだ。料理は上手いが、このちゃんのもつレシピは魔改造ならぬ肉改造されている。ハルに褒められて明るくなるこのちゃん。やはり好きな人には褒められたいし、おいしいと言って貰いたいのだろう。

「なるほど、これは上手そうだ。いじきたない食欲の化身&ムガツ！」

「はいはい、そこまで」

またファイアがいらないうことを言おうとしたので口をふさぐが少し遅かったようだ。このちゃんの手にあつた鍋蓋が真つ二つになっている。

「んー、んー、ぶはっ！ 何を・・・」

「ファイア」

これ以上同じように騒いでいても話が進まないの、少し威圧させてもらう。ファイアだけでなくハルも身じろがせてしまったが、場を治める。ファイアは少し愚痴をこぼしており、ハルも威圧してしまったためこのちゃんに少し睨まれたが・・・

「うーむ、なんでこんな緊張感のあるメシになっているのかわかんないんだが・・・とりあえず簡単な紹介でもしとくか。こいつはファイア。例の如く親父が送り込んできた」

ハルが紹介するとこのちゃんが肉を取りつつファイアを見る。ファイアは無視した

「んで、こつちはこのは。えっと……庭にある離れに住んでて、高校の同級生で、昔からの幼馴染みたいな付き合いで」
「そして、人ではない」

その奴と同じだ

フィアの言葉に少しだけ沈黙した。僕に気付くんだからこのちゃんにも気づくのは道理だ

「……………そういうこと。ここでの、お前の先輩みたいなもんかな」

「ハル、僕は？」

「お前は見本にならんだろう」

「そうですね。守人くんは人らしい生活してませんね。それにしてもよく人ではないとわかりましたね」

僕だってみんながない間の家事とかしてるのにな、と思いつながらも、正論なので苦笑する。それに、僕のこと簡単に気づいたフィアなら、同じくこのちゃんのことを見破るのは簡単だろう

「ふん、鍋が勝手に壊れるものか。人の姿でもある程度本体の性質を操れるからな……何かの刃物か、貴様」

「あなたは？ と聞いたら素直に教えてもらえます？」

笑顔でこのちゃんが問いかけるも、フィアは鼻息で答えを返す
再び場が沈黙し、緊張し始める。そこで、僕は疑問に思ったことがあったので聞いてみた。

「ねえ、フィア。僕の時は何で人じゃないとわかったの？」

質問するとフィアに呆れられた。このちゃんやハルまで気づいていなかったのか？　と言いたげだ。

「お前は自分のことなのにわからないのか？」

「な、何か変なこと言った？」

「守人はわかりやすいからなあ……」

「そうですね。呪いというより、畏れとでも言いましょうか。雰囲気
気が普通の人と違うんですよ」

どうやら僕の呪いや威圧感とでもいうような気配が常時でている
ようだ。さすが、ムジユラの仮面に似ているだけある。

この家に最初に来たときの騒動や、偶に外出したときに見る人見
る人が怖がるのはそのせいか！（見た目も不良みたいで怖がられる
その上、呪われただけと思っている守人の知らない所で、本人は伝
説の防具というか、一種の宝具と化している）

「僕的には普通にしているつもりなんだけど、そんなに呪いが漏れ
てるの？」

皆に深く頷かれてしまった

今まで知らなかった真実を知ってしまった。今思えば、崩夏さん
に輸送される前にペタペタ貼り付けられたのはそれらを抑える札だ
ったのだろう……

落ち込む僕を放置して、話が続けられた。

前例であるこのちゃんを例に、どのように過ごしてきたのか、呪
いが解ければどうなるのか、どれだけの時間を解呪に必要とするの

かを話していた。

勿論正の思念を受けられるような生活をしているので、人助けが主であったし、バイトでもいいようである。

よくバイトできたなと思う。ずっと外見変わらないはずなのに。今でも、ずっとこの地にいるこのちゃんが問題なく高校に行けている（高校生で通じている）のが信じられん。クロちゃんとか見た目子供なのに二十歳って言うてるしなあ

さらに、呪いは解けてもヒトになったモノは存在が変質してしまっているのですそのままとか、呪いの度合いによって解けるまでの時間は異なるなど色々話し合いは続き、このちゃんが「モノであった我々ヒトでもあるように変質させるほどの呪いは、そう簡単に忘れられるものでも、打ち捨てられるものでも、償われるものでもない」という共通理解できるという点を述べ、フィアとギスギスしながら話は終わった

正直、いつの間にかモノとなりヒトとなった僕としては、呪われていることは認めているが、罪とか責任と言われても、「知らん」としか言いようがない。そうなるように使ったのは人間だし、自分はまだ人間じゃないしね。他の世界でもっと残酷なことをした自分もいるからなあ……

茶を飲み、そんなことを考えている間に、フィアの部屋をどうするかに話は移っていた。

「そう言えば、今夜はどうするんですか、寝るところとか」

「え？ いや別に……この空いてる和室とかに」

「こ、ここに泊まるんですか？ そ、それはマズくないでしょうかと思ったりしますですけども！」

「だって離れの部屋は空いてないだろ。黒絵は帰ってこねーし……」

そう、離れは二部屋あるのだが、片方はこのちゃんで、もう片方

はクロちゃんが使っている。僕はハルと同じくここに住んでいるが、最初はこのちゃんにもものすごく反対され、脅された。その頃を思い出せば、思わず涙がでそうだった。

「そうだ。私の寝所は最上級の部屋を用意しろよ。そういうところで償いをしてもらわねば」

「「償い？」」

思わず僕まで聞き返してしまう。そして、すごい剣幕で噛みつかれる。

「忘れたとは言わさんぞ！ お前、私の、私の身体を……さつきはあんなにも乱暴に弄りおったではないか！ あんなところに指を入れられるなど、顔から火が出るかと思っただわ！」

そこまで言われると思い出す。フィアが宅配業者に運ばれ、ハルが黒い箱を弄り回していた時の話だ。漏れ聞こえた声で女性とはわかっていたが、今思うとあの時のハルはかなり変態だった。

「ごっくん、と湯呑が畳に落ち、このちゃんがカタカタ震えながら立ち上がる。無理して愛想笑いを浮かべたが、結局失敗。ものすごく誤解をして走り去って行った。」

「うわああああん！ 二人はもうそんな関係いつ！？」

玄関が乱暴に閉じられ、居間には現状についていけないハルと何故か満足そうなフィア、かわいそうと思いつつも笑ってしまう僕が残った。

てきにのろわれてしまった！ 2度目（後書き）

ありがとうございました。

召喚士は逃げられない（前書き）

これは短編で書いてみた魔法少女リリカルなのはキャラの妹に転生したという小説を、連載にするならこんなのはどうだろうと書いた作品です。

シリーズ内の世界にいる主人公は同一存在として扱っています。主人公は他の短編や連載のキャラを呼び出します。

そっというのがお嫌いな方はどうぞお戻りください。
読んでいただけたら幸いです。

召喚士は逃げられない

この世界の一般的な魔法は術式というプログラムにエネルギーとなる魔力をリンカーコア走らせることで発動します。魔法を素早く円滑に行うには、高い技能を要しますが、デバイスと呼ばれる機械にあらかじめ登録することで、時間と手間を短縮させられます。

このデバイスが魔法の優劣を、持ち主の魔力量や資質が使える魔法の幅となると言えばわかりやすいかもしれません。

私 シャロ・ル・ルシエは魔法のない世界から転生し、魔法のあるこの世界に転生しました。私が生まれた所は、ミッドのように幼い頃から魔法などの英才教育をされていたわけではないので、固定観念というものがありませんでした。

そのため、基本的なことだろうと考えて魔力を放出し、集め、固定し、形を変えたりして遊び半分で練習していました。（残念ながらよくある火の魔法とかはできませんでした。）

ある程度成長するころには自然の中での暮らしにも慣れ、この世界の常識も学んでいました。

次元世界やこの世界の魔法のこと、生活や村 アルザスの掟など色々ありました。不思議なことや新しいことばかりで覚えるのが大変だったりしましたが、その中で魔法についての話を聞いたとき、デバイスがないと魔法を使うのが大変だと知った時はがっかりしました。

しかし、ここで家系の血と私の特異性が噛み合って変な方向に発展したのか、レアスキルというものを得ていました。

レアスキル「召喚」

（レアスキル扱いなのは、すごい術式やデバイス有り無しに関係なく、私の秘密に起因する能力のため。しかもレアスキル認定されたのはずっと後。）

召喚士というのは少ないながらも他にもちゃんといいますが、私ののは変わっていました。

普通は、召喚する生物と契約したりすることで、遠く離れた場所でも呼べるようになります。

私の一つ年上のお姉ちゃん（キャラ）も召喚士の一人で、特殊技能「竜使役」を持ち、アルザスの守護竜　ヴォルテールに認められ、フリードリヒ（普段は小さい）と合わせて二騎の竜を召喚可能です。対して、私は召喚士としての才能はあるようですが、なぜかヴォルテールにすら微妙な反応（認めてもいいけど、何か怖いみたいな。異質なものを見る感じ？）されており、契約をする相手がいませんでした。

そんなある日焦れた私が己が感性に身を任せ、空間の向こうからこちらに召喚しようとしてました。

いっしょにいたお姉ちゃんが止めようとしますが、私は止まらず続けます。傍から見ればそれは術式もめちゃくちゃな成功する見込みのないようなものでした。

（いや、ある！　あの向こうに私が呼べる何かがある！）
確信した私は魔力をさらにつぎ込み、向こうとこちらを繋げました。そして、召喚は成功。何かが魔法陣らしきモノの輝きと共に現れました。

目を開けて見た先にあったものは、

『どこ？　ここ』『知らない　はじめて』『しごと　もどらないと』
（あれ？　君は・・・）

「な、何これ？」

お姉ちゃんがそういうのも無理はありません。

私たちの視界にあるのは自然の風景と黒いまりものようなものでした。

しかし、私にはそれが理解できました。

「黒藻の獣・・・」（あ、これ私だ。）

「え？（キユク？）」「」

色々な世界に転生していった、私という存在の一つである黒藻の獣がそこにいました。

少しの間唖然としましたが、黒藻たちとお姉ちゃんの声で我に返り、召喚を解除しました。

どうやらうまく帰ってくれたようで、ホッとしたのもつかの間に今度はお姉ちゃんが色々聞いてきましたが、何とか誤魔化し、帰ったのでした。

そして月日は流れ、とうとうお姉ちゃんが村で竜を召喚する儀式をすることになりました。

結果は制御に失敗して暴走、村に被害が及び、私も色々やっちゃいました。

ええ、呼べるかと思っていたあれがホントに呼べるとは・・・

そのため、恐れられた私たち二人は村を出ることとなりました。

死者がでなかったのが不幸中の幸いでした。

私たちは、この第6管理世界に駐在している管理局の自然保護隊に保護してもらおうと考え、色々大変な思いをしながら保護してもらえました。

落ち着いてからは私たちも働きだし、生活できるようになろうとそ

れぞれ働いています。

お姉ちゃんはあるところまで持て余されていたようですが、今ではどこかの辺境の自然保護隊に落ち着き、働いているそうです。

そして、現在の私はミッドの陸士部隊で掃除をしています。

「よし、きれいになったかな。」

「お、シャロちゃんお疲れ！」

「お疲れ、いつもご苦労さん。」

「あ、お疲れ様です。お仕事頑張って下さい。」

「「おうよ！」」

この人たちはノリがよく、私はちょっとしたマスコット扱いです。ほんとはちゃんとした訓練を受けて部隊に隊員として所属した方がお給料もいいんですが、戦闘するのは忌避感がありますし、正直この年で戦えと言われても無理です。（前世の価値観のためでもある）

魔力は成長した現段階でAAくらいはありますが、恐ろしいほどに魔法使いの才能は有りませんでした。空間的な把握とかは結構得意なんです、砲撃やらシューターやらシールドやらの戦闘のためのものやブースト系といった補助の魔法がほぼ使えません（強化はできました。能力にリソースを喰われているんだろなあ）。ちなみに力の強い存在を召喚できることは秘密にっていて、お姉ちゃんにもお願いしています。

そこで、現在はデバイスマスターを目指して勉強をしながら、一人

の清掃員として働いています。

今日も仕事を終わると休憩室の一席を借りて勉強中です。

「ん〜。やっぱり機械系は苦手だなあ……。でも、こういうのって作ってみたかったし。」

「あれ？ シャロ、また勉強？」

「ん？ あ、GINGAさん。こんにちは、休憩ですか？」

「うん。今日の訓練も終わって、次はデスクワーク。また今度いっしょに練習する？」

「あ、お願いします。やっぱり独学っていうのは難しいですね。」

「でもよく知ってたよね？ 第97管理外世界の武術だっけ？」

「はい、そうなんですけど、やっぱりちゃんと知ってる人がいればなあ……。」

「まあ、頑張りましょ？ シューティングアーツには、ああいうのがあんまりないから面白いわ。」

「ぶー、こっちは面白くありません。」

そう、私は地球の武術を真似て、どうにか実戦で使えないか検討していた。

最初は、私の素敵能力で背格好が比較的近いヒトを召喚し、一緒に練習していました。

それを見かけた他の隊員さんたち（GINGAさんもいた）がそれを見かけ、私たちに「その子は誰？」と聞かれたので「召喚しました。」

「召喚されました。」と素直に答えたら、

「誘拐！？」「まさかシャロちゃんが……」「自首しよう、な？」

「いや待て、召喚士だったのか!？」「マジで!？」

と上から下への大騒ぎに発展。

事情を説明して（誤魔化して）、（「相手に召喚許可をもらっている。」「一般の召喚士とは違って、何が呼べるかわからない」「ちなみに、後呼べるのは黒い藻とかです。」）なんとか大きな問題にならないようにして頂けました。

ただ、現在お姉ちゃんと一緒に保護してくれているフェイト・Ｔ・ハラオウンさんが駆けつけ、

「何で教えてくれなかったの!？」

と涙目でぐくぐ揺さぶられました。不覚にも「（かわいい・・・ハッ!）」と、ときめいてしまいました。（あれ？ 魂的には問題ないのかな?）

通りがかかる局員の皆さんは微笑ましくみており、中にはフェイトさんに見惚れていたたり、写真撮影に忙しい人や、その買い取り交渉をしている人までいました。

・・・また後日の話ですが、早とちりしたお姉ちゃんがポロツと秘密にもらっていたことをフェイトさんにもらし、フェイトさんが再び仕事場に突貫してきました。

「ぐああああ、私の平穩が一步どころかなり遠のいた気がします！これが噂のフラグ!？」

その後、私は戦闘要員の人たちのお誘いを丁寧に断りましたが、以前よりもよく話しかけてくれるようになりました。

ギンガさんはその武術にちょっと興味があったみたいで、一緒に検

討したりもします。
そんな毎日でした。

今日もお仕事に勉強、訓練などをしていた昼下がりの休憩中、なぜか部隊長に呼ばれました。

仕事かな？ それとも異動？ まさかクビ！？ と悩んでいると、部隊長室に着き、ノックをして来訪を告げます。

すると入室許可がすぐに下り、私は中へと入ります。

挨拶をして、用件を伺うと、

「シャロの嬢ちゃん、今度新しく地上にできる機動六課に異動な。」

「え？」

「いや、な。うちで研修した八神つーのが新しくここ、ミッドにエリートを集めて部隊を造るんだと。八神を筆頭にヴォルケンリッターやら、高町やハラオウンの嬢ちゃんたちが集まってるんだよ。」

「あゝ、フェイトさんあたりに呼ばれたんですね？ 何ででしょう？」

「さあな、一緒に働きたいとかじゃねえのか？」

「そ、そんな理由でいいんですか？」

驚きです。仮にも正義の治安維持組織がそんなことで権力使っているのでしょうか？

（大げさですが、）管理局の腐敗を感じます。

「いいも何も正式に手続きまでしてるから、諦めていくんだな。」

「そんな〜・・・」

「はっはっは、まあ向こうでも達者でな？」

「わかりました。えーっと、他には何かありませんか？」

「ないな。さ、戻って荷物をまとめるといい。そんなに余裕ない
だろ？」

「うわ、ホントだ。それじゃあ、失礼します。」

おう、と声をかけられ、私は退室し、急いで部屋に戻ります。

期限が近いため、少しあわただしくなるでしょう。

ああ、皆さんに挨拶して回らなきゃ・・・

これからのことに不安を感じながら私はせっせと異動の準備を始めたのでした。

召喚士は逃げられない（後書き）

ありがとうございました。

省略したところは、この作品を続けた場合に、番外編などで書くかと思っています。

召喚士は逃げられない その2（前書き）

召喚士は逃げられない その2

あの後、急な異動にも関わらず、手の空いた人たちでさよならパーティーを開いてくれたり、ちよつと感動して涙がでそうになったり、何人かの男の人（女の人もいた）が「キャロちゃんいかないでくれ！」とかいったり、参加しにきた親父さんが「ああ、よく見る。一年だけだぞ？」とか水差したり、大変でした。

ミッドチルダ中央区画湾岸地区に本部隊舎があり、試験的に設立・運用されることとなった古代遺物管理部機動六課というのが、私が今度異動することになった仕事場です。

というか、すごい今さらですが、私って入隊してたんですね？

雇われているだけだと思ってたんですが・・・

そこらへん保護担当していた方に丸投げして、必要最低限の確認はしたはずなんですけど、言われるままに書きまくってましたからね。見落としちゃいましたか？

なぜ一介の清掃員たる私がこのような場所に来ることになったのか、知りたいような知りたくないような・・・

例のフラグではないことを願いながら、私は入口から入り、受付へと部隊長に取り次ぎをお願いします。

私は受付の方に言われた場所へと向かいます。

まだ、ドタバタと多くの職員さんたちが準備に追われ、何人か私を

怪訝な顔で見ますが、すぐ自分の仕事を思い出してそれにとりかかります。

そして、特に呼び止められることなく、部隊長室へとたどり着きました。

「（ここ・・・ですよね？）」

ちゃんと部屋を確認し、深呼吸を一つ。

そして、ノックしました。

「部隊長はいらっしゃいますか？ 本日こちらに異動することになったシャロ・ル・ルシエです。御挨拶に伺いました。」

中から「入ってええよ。」と聞こえてきたので、中へと入ります。

「失礼します。本日よりこちら「ああ、そんな堅くせんでもええで？」はあ・・・？」

私の前には八神部隊長が備え付けられた席に座っており、隣には小っちゃい妖精さんがこれまた小さい机に座っていました。

とりあえず、上官？ 雇い主？ の前で突っ込むのは我慢して、

「ええっと、初めまして。 今日からここで働くことになったシャロ・ル・ルシエです。 よろしくお願いします。」

「うん。初めまして。 私は部隊長の八神はやて二等陸佐や。 保護者のフェイトちゃんから聞いているで、色々とな。」

「部隊長補佐のリンフォースツヴァイ空曹長です。 よろしくです！」

妖精さん リンフォースツヴァイさんの言葉に私も挨拶を返し

ながら、部隊長の言葉に内心ドキツとしました。

「あの、私は清掃員として雇われたんですよね？」

どこか顔が引き攣るのを止められないままそう尋ねましたが、

「ああ、聞いてないんか？ シャロちゃんには寮母のアイナさんと一緒に寮の管理をしておうと思ってな？ ちょうど人手が足りなかったし、フェイトちゃんも会いたがってたから譲ってもらったんや。」

「（オヤジさん、私を売りましたね！ というかホントにそんな理由もあつたんですか！）」

「そうなんです！ 寮も広いのに人手が足りない、とアイナさんも言っていました。」

「じゃあ、私はこれから寮母のアイナさんの指示に従えばいいんですか？」

「基本そうしてくれたらええ。 そういや、シャロちゃんはデバイスマスターの資格とろう思ってたんのやろ？ 空いた時間にシャーリというメカニックに教わってもええで？」

それに、と腹黒い笑みを浮かべながら、

「お姉ちゃんのキャロちゃんとはまた違う召喚ができるんやってな？ 騒動起こした話はフェイちゃんからも聞いてるで。」

そっちが本命かー！！

うわー、めっちゃ興味津々じゃないですか。 値踏みされてますよ？ 私を見極めようとしていますよ？

「格闘技の練習もしてるって聞いたとる。 よければ一緒に訓練せん

か？」

戦力にカウントされてません？

これは不味いです。争うのは嫌いなんですよ？

「そ、それは入隊しろということですか？」

「いや、あくまで善意で言っただけだよ？」

嘘だ！

ちよ、そのリインさん！？（クエスチョンマーク）を浮かべてないでなんか言って！ 空気が変わるかもしれないから！

「はやてちゃん、いい考えですね！ どうですか？ フォアードたちと一緒に訓練しません？」

そうですね。あなたはそっち側ですよ。

「いえ、私には私の仕事がありますし・・・」

「ああ、そっちは私から言っとくから何も心配いらんよ？」

「勉強も・・・」

「一日中ずっと訓練するわけちゃうから時間はとれるよ？」

だめだ。

遠回しに言っても全部潰されますね。仕方ありません。

私は深呼吸をして落ち着き、八神部隊長としっかり目を合わせます。

「八神部隊長、その申し出はありますが、お断りします。」

「・・・なんでや？」

「私は自分の身を最低限守るために鍛えています、それ以上を求

めていません。デバイスマスターの資格も今の所、取れたらいいなぐらいにしか思っていない。そして、争いごとは嫌いです。」

八神部隊長から微かに動揺したような、当てが外れたというような感じがしました。

「そして何より、勝手に人を厄介事に巻き込もうとするのが嫌いです。どうやら私の能力欲しているようですね？ 権力やらしみやらで正當に利用しようとする分、犯罪者より性質が悪いですね？」

満面の笑顔で言っていました。

空気がピリピリします。

私と狸（八神部隊長）が目を合わせ続け、リンさんがおろおろしています。

そんなにらみあいがしばらく続き、狸が「ふう……」と一息はき、空気が弛緩しました。

狸さんは苦笑いしながら、

「ごめんな。騙そう思ってたわけやないんやけどな？」

「黙ってるのも悪いと思いますよ？ それより、やっぱりフェイトさんあたりから聞いたんですか？ たぬ、八神部隊長？」

「何か今変なこと言わなかった？」

「（たぬ……？）」

言いませんでした、とそっぽを向くとジトーツと見られた後、また苦笑されました。

「もー！ はやてちゃんもシャロちゃんもびっくりしたじゃないで

すか！」

「ごめんな、リイン。それで、さっきの話やけど、察しの通りやで。なかなか会われへんかったけど、通信では割と話してたんでな？ その時にポロツと。」

「あの？ フェイトさんって優秀な執務官と聞いていたんですが・・
」

「ああ、プライベートはかなり天然やで？ それに過保護やから、困ったら周りに聞きまくるし。それに内容が内容やからえらい混乱してたわ。」

「フェイトさーん！！ と内心で叫んでいると、八神さんが言いましてた。

「シャロちゃんは何か子供らしくないな？」

「褒め言葉ですか？ ありがとうございます。」

「ちやうちやう、よく考えてるっちゅーか、聡いっちゅーか、外見子供で中身が大人みたいな？」

「コン君やイチちゃんじゃないんですから。」

「なんで知つとんの！？」

「はやてちゃん、何のことですか？」

「それより、仕事の話ですが。」

「流すなや！」

「何なんですか ！？」

「ぜえぜえと疲れた様子の八神さんたちを尻目に私は話を続けました。

「結局、仕事はアイナさんの指示に従えばいいのですか？ 八神さん？ リイン曹長？」

「八神さんって、えらいフランクになつたな・・・」

「いや、八神さんにはもう敬意いらななくなつて。」

「ひどつ！ まあええ、はやてでええから。」

「リインもリインでいいですよー！」

「ではリインちゃん、と。」

「そ、それは嫌です！ さん、さんにしてください！」

「わかりました。さん。」

「さんだけ！？」

と言って笑えばリインさんが怒ってすねだしました。

ひとまずリインさんを宥めて落ち着き、話の続きとなりました。

「シャロちゃん？ やっぱり訓練してくれんか？」

「またですか？ 何でそこまで私にこだわるんですか？」

「戦力が欲しいからや。」

おっと、真面目な話ですか。もう疲れました。

話を聞くと、どうやらここまで過剰戦力を集めたのは、予言というのが関わっているそうです。それを防ぐために、この機動六課が設立されたと教えられました。

「ちなみに、これ話したんはシャロちゃんが初めてや。」

「アホですか、あんた？」

アホって言われた！ と嘘泣きするはやてさんを無視します。

リインさんによしと慰められて少しすると、起き上がりました。

「もう、容赦ないな。」

「はやてさんに遠慮は無用だとわかりました。」

本気の顔で言いましたが、苦笑で流され、はやてさんも真剣になり

ます。

「お願いや、力貸してくれへんか？」

「その時だけ召喚するっていうのはどうですか？」

「それやとシャロちゃん狙われたら危ないやろ？」

んゝゝゝ。この人は私がどれだけできそうだと思ってるんでしようか？

「すみませんが、はやてさん？ 私ができることは知っていますか？」

「レアスキルの召喚に身体強化ぐらいやな。後はシールドとかの基本魔法とか？」

「あ、キャロちゃんみたいにブースト系もできるんじゃないですか？」

「できませんよ。」

「は？」

「へ？」

二人とも勘違いしていますね。まあ、誰にもちゃんと言ってませんでしたけどゝゝゝ

「私ができるのはレアスキルの召喚と身体強化だけです。他は適正が低すぎて使えないようなものです。ついでに、デバイスも持ってません。」

「な、何やって（ですって）ー！！」「」

召喚士は逃げられない その2（後書き）

ありがとうございました。

召喚士は逃げられない その3（前書き）

なぜかネタのはずなのにどんどん続きを書いてしまいました。

召喚士は逃げられない その3

私ははやてさんたちに色々説明した後、それでも戦力が必要だからということで、渋々認めました。（ちやつかり給料UPや、仕事を優先するとかの約束も取り付けた。やった！）

アイナさん（紫短髪の美人さんだった。というかブスを見たことがないような・・・）の所へ行き、一緒に寮の掃除や準備を行いました。

そして、挨拶回りに出掛けたり、

「皆さん、よろしくお願いします。寮のことで何かあったら教えてください。」

「食堂の皆さん、初めまして。今後お世話になります。」

「お疲れ様です。飲み物でも持ってきてきましようか？ それにしてもすごいヘリですね？」

裏手の森で訓練したり（召喚も合わせて許可もらい済み）、

「えっと、ここでごうすれば・・・あれ？」

「・・・50、51、52・・・」

「ぐっ、あが……。も、もう一度！」

ヴォルケンリッターの皆さん（主に二人）に絡まれたり、

「初めまして、シャロ・「え、あの何で怒るんですか？ 主はやて？」」

「ちょっと、シグナム副隊長やめてください！ ヴィータ副隊長も参加しないで！」

「（ブチッ）いい加減にして！ 召喚！」ドゴ ン！！！

なのはさんに遭った（会った）り、

「初めまして、高町隊長。 フェイトさんに保護されているシャロ・ル・ルシエです。」

「え？ フェイトさんと付き合ってるんですよね？ ベッド共有するんでしょう？」

「タイム、タイムを要求します！ 絶対さっきのこと怒ってますよね！？」

フェイトさんに抱きつかれて色々聞かれたり、

「フェイトさん、お久しぶりです。 何だか会ったびにスキンシップ激しくなってますん？」

「お姉ちゃんももうすぐ来るんですよね？ 楽しみです！ エリオ

さんも一緒なんですよね？」

「わかりました。 エリオさんはお兄ちゃんって呼びますね。 お母さん！ ぎゅむっ・・・」

はやてさんとリインさんとお話ししたり、

「はやてさん、リインさん、お疲れ様です。 お茶入れましょうか？」

「何だか生き急いでますね？ ちなみに交際相手とかは？ あ、すみませんでした！」

「ガジェットドローンですか？ 魔法を無効化する？ 限定的に質量兵器を使えばいいんじゃないですか？ 無理ですか。」

そうして私も準備やお仕事、勉強、訓練をやっている内に、一か月程経ちました。

私はなぜかフォワードの皆さんより先に訓練を受けていますね、主に副隊長たちに。 一度「暇人ですか！？」といったらキレましたからね。 まったく、いい迷惑です。

今日は機動六課の隊長三人＋リインさんが優秀なフォワード候補を見に行ってます。

私もなぜか誘われましたが、断ったら簡単に引いたので言ってみた

だけでしよう。

フェイトさんは残念がってましたが・・・

シグナムさんはお姉ちゃんたちを迎えにでたそうです。お姉ちゃんとフリードに会うのはずいぶん久しぶりですし、お兄ちゃんとは初めて会うので、ちょっとドキドキします。

夕方ごろに仕事を終えた私は、いつものように森の開けた場所で訓練していました。

汗をかいて疲れた私は、よく相手をしてきている赤い髪の人を召喚解除し、寮へと足を向けました。

辺りが暗くなってきたており、体を冷やさないと足早に自室へと戻った私は、シャワーを浴び、夕食を食べに行きました。

「うゝ、お腹減ったゝ。眠いゝ。」

ふらふら歩く私をすれ違った何人かが微笑ましく見ており、中には「お疲れ様。」と声をかけてくれた人もいます。

「お疲れ様です。おっと、到着つと。」

中に入って注文を言いに行こうとすると、その人たちに気づきました。

ピンクの髪の私に似た女の子と赤い髪が跳ねている男の子と一緒に食事をしていました。

すぐに駆け寄ろうかと思いましたが、仲がよさそうです。

思わず邪魔者は退散すべきか！？と考えましたが、お姉ちゃんがフリードに袖を引っ張られて私に気づきました。

こうなっては仕方がないと諦め、お姉ちゃんたちに駆け寄ります。

「お姉ちゃん久しぶりー！ フリードも元気？」

「「シャロ（キュクー）！」」

フリードはまだ私に対してちょっと近づきづらいらしいですが、少し距離を開ければすんなり挨拶してくれます。

私はエリオお兄ちゃん（？）の方を向き、挨拶します。

「初めまして、私キヤロお姉ちゃんの妹のシャロです。あの、エリオお兄ちゃんですよね？」

「「お兄ちゃん！？」」

「あれ？ ああ、同じお母さんだからお兄ちゃんでもいいかなって思っただけですけど・・・ダメでした？」

「ううん！ そんなことないよ。お母さんってフایتさんのこと？」

「ええ、この前そう呼ぶことに決めました。呼んだら喜んでくれましたよ？ 今度、そう呼んでみたらどうですか？ お姉ちゃんも」

「

「私も！？」

「そうですよ。嫌ですか？」

二人とも嫌ではないけどって顔してますね。 気恥ずかしいんでしょうか？

「お母さんっていうよりはお姉さんって感じが強いんじゃないですか？」

そういうと二人とも同意していました。 この場にお母さんがいなくてよかったですね？

親であるうとしているのにお姉さんと思われるのは、うれしいでしょうけど複雑でしょうね。

「お前たち、それだとテストロッサが悲しむぞ？」

「シグナム副隊長！ お疲れ様です！」

「お疲れ様です！」

シグナムさんが食事をもつてやってきました。
というか、話聞いてたんですね。

「あ、シグナムさんお疲れ様です。」

「ちよつと、シャロ、失礼だよ！」

「そうだよ。 ちゃんとしないとだめだよ？」

キククー！とフリードまで抗議しますが、気にしません。 もはや、
この人に対する敬意はあの時消えました。

「ああ、構わん。 お前たちもシャロを見習ってもいいぞ。」

挑発的な笑みを浮かべながらそういうも、二人は軽く困惑しています。

「まあ、私はお姉ちゃんたちより一か月くらい早く来て仕事して
いましたので、それなりの関係ができたんですよ。 じゃあ、私も
ご飯注文してきますね。」

そう言ってお姉さんたちの所へ注文に行きました。

夜、久しぶりに姉妹仲良く積もり積もった話をしつつ、お姉ちゃん

と同室のお兄ちゃんとも話していました。ちなみにフリードは夢の中。

「それじゃあ、この一か月で隊長たちとも訓練もしてたんだ？ 私たちと一緒に訓練するの？」

「いえいえ、私はここに仕事に来たので、仕事が中心です。ちなみに主に寮の管理を手伝っています。」

「へー、じゃあ一緒に訓練できないね？」

「シャロも一緒ならよかったのに・・・」

「お姉ちゃん、私の技能の偏り具合知ってるでしょ？」

「えー、でも召喚できれば十分じゃない？」

「シャロも召喚士なの？」

「あー、召喚魔法を使えるんじゃないかって・・・まあ、レアスキルみたいなものです。名前はそのまま『召喚』です。」

「シ、シンプルだね？ どう違うの？」

「お姉ちゃんは知っての通り、主に召喚する対象と契約することで遠く離れた自分の元へ召喚するのが召喚魔法です。フリードみたいに力を開放する召喚もありますが・・・」

「シャロの召喚は、知らないどこから、会ったことのない何かを呼び寄せるって感じだよな？」

「え？ そんなことできるの？」

「はい。だからこそそのレアスキル判定です。ちょっと騒動を起こしちゃって、無理やり登録されました。」

そういえばそんなことあったなあ、と過去を思い出してしまいました。

前を向けば、お兄ちゃんの顔が微妙に引き攣り、隣でお姉ちゃんが首を傾げていました。

「そうでした。むしろその後の方が問題です。ええ、私にとっ

ては・・・」

「な、何したの？」

お姉ちゃんの方を向いてニコッと笑うと、それに気づいたお姉ちゃんも狼狽えます。

「あれを言ったことまだ怒ってるの？」

「怒ってませんよー。 お姉ちゃんが黙ってくれてたらここに来ることはなかったのになー、とか思ってますよー。」

「（怒ってる・・・）」

「・・・はあ、ホントに怒ってませんよ？ あれは自業自得でしたし、いつかばれるモノですし、ね。」

「あれって何のこと？」

そんな私の態度と言葉に疑問を持ったお兄ちゃんは尋ねてきました。

すると、お姉ちゃんが過去を思い出したのか、苦笑しています。

「キャラ？ どうしたの？」

「あはは、大丈夫だよ、エリオくん。」

「うーん、人に言い広めないでくださいね？ これ以上の面倒事はイヤですから。」

お兄ちゃんがうなずくのを確認して私はその名前を告げました。

「あれっていうのは私が呼ぶ何かの内の1つ、いや一柱とっていいですね。 名前はギリティナ。 この連なる次元世界にいない竜ですよ。」

そう、それは私たちがアルザスの村を追放される原因となった出来事。

お姉ちゃんはお竜召喚の儀式に臨んだんですが、制御が甘かったためか竜二騎が暴走しました。

一騎は白銀の竜フリードリヒ、もう一騎は大地の守護者と讃えられる巨大な竜ヴォルテル。

二騎が暴れ、人が逃げ、村が壊されていきました。

そこで、極限状態に陥った私が潜在能力を真に発揮しました。

先程言った、レアスキル『召喚』で今までにない存在　ギラティナを召喚したんです。

私はその竜に助けを求め、竜はそれに答えてくれました。

結果、村に多大な被害がでましたが、人が死ぬことなく、二騎を鎮めた竜は元の世界に帰っていきました。

「というのが、その時の話です。強い存在を呼べると知られたら、誰に利用されるかわかりませんからね。このことは誰にも言わないようにしてください。」

まあ、もう無駄かもしれませんが・・・

隣のお姉ちゃんの手を握り、私は語り終えました。

お兄ちゃんは沈んだ表情で少し俯いており、お姉ちゃんは少し辛そうにしながらも笑っていました。

「も、シャロは自分のこと美化しすぎだよ！」

「いや、だってお姉ちゃん？ 私の言わなかった所言ってみます？」

《ギリティナは強かったけど、ボケてたから被害が増えたって、住人全員が思わずツツコミしたって・・・》」

「え？ あー、うん。それでいいよ。あれは忘れたいよね。」

「はい。自分で呼んでおいてなんですけど、あれはないです。」

ちらつとお兄ちゃんの方をみるも、まだ俯いたままです。

そんなに気にされると心が痛むんですけど・・・

「お兄ちゃん？ 気にしないで下さいね？ いや、真面目に語ってしまいましたけど。」

「そうだよ、エリオくん。私だってもうとくにフリードだけなら制御できてるから。」

「・・・うん。ごめんね、僕が心配かけちゃって。それと、二人とも。」

「「うん（はい）？」」

「いつか決心がついたら話したいことがあるんだ。その時になったら、聞いてくれる？」

「「もとろん（ですよ）！」」

なんたつて家族なんですから！

「ちなみに、愛の告白ですか？ 二股宣言ですか、やりますね？」

「えー！？」

「ち、違っよー！」

そんな風にからかつて、その夜はお開きになりました。

お姉ちゃんが少し膨れてたのはご愛嬌。

召喚士は逃げられない その3（後書き）

ありがとうございました。

召喚士は逃げられない その4

お姉ちゃんたちが来た翌日も私はお仕事です。

職員の皆さんが起きてから部屋に掃除機をかけたたり、洗濯したり、拭き掃除やら備品の点検などなどやることはいっぱいです。

手持無沙汰にしたお姉ちゃんとお兄ちゃんが手伝おうとしますが、私たちのお仕事ですので丁重にお断りして、今のうちに挨拶に回ったり、遊んではどうかと助言しておきました。

お姉ちゃんとお兄ちゃんは顔を見合わせ、どうしようかと迷っていました。

お昼が過ぎて大体の業務が終わったころ、アイナさんたちに「今日はおもういいよ。」と言われたので、私はお姉ちゃんたちと合流します。

あの二人は一体何してるんでしょうね？

念話で確認してみると、どうやらいつも私が訓練している森の方にいるとのことで、そちらに向かいます。

どうやらフリードの竜魂召喚を見せていたようで、久々に全開のフリードが嬉しそうに鳴いていました。

お兄ちゃんはそれを見て驚いていましたし、お姉ちゃんはそんなお兄ちゃんを笑顔でみています。

「お姉ちゃん、フリード解放したんですね。」

「あ、シャロ！ お仕事終わったの？」

「え？ あ、シャロ、お疲れ様。」

「グアアアア！」

「どうも。フリードリヒのその姿を見るのは久々ですね。」

お姉ちゃんが抱えられるサイズから人を4人くらいなら運べそうなほど大きくなるのは、相変わらず不思議ですよね。

「今日は何してたんですか？」

「とりあえずシャロの言った通り、挨拶回りをしてきて・・・」

「お昼食べてお話したら、エリオくんがフリードの本当の姿が気になったから許可をもらって実際に見せてたの。」
「なるほど。」

そういえば、私もフォワードと訓練するように言われていますが、召喚使わなきゃだめですかね？

ギラティナ他、呼んだら終わりそうな奴らはあんまり呼べませんし・

明らかに違う世界の人間もダメ・・・（向こうで警察沙汰とか、技術の漏洩とかが問題）

やっぱり前みたいに攻撃だけ召喚しますかね。

いつものヒトは皆の前で能力を見せるのが躊躇われますし・・・
前の騒動の時はすぐに召喚解除して、ただの暇人だつて言っちゃいましたしね。

嘘ついたことがばれたら面倒です。

そんな風に考え込んでいるとお姉ちゃんとお兄ちゃんが心配そうに私を見ていました。

フリードも元（？）の小さいサイズにまで戻っていました。

「シャロ、どうかしたの？」

「大丈夫？」

「ああ、すみません。フォワードと一緒に訓練に参加することになったかどうか考えていました。」

「そっか、ずっとは無理でも少しは一緒に訓練するんだよね。」

「でも、大変じゃない？」

「いえいえ、お姉ちゃんたちしか大変だと思いますよ？ 朝から晩まで生かさず殺さず密度の高い訓練の上、デスクワークもあるでしょうし。」

そう言うのと、二人とも少しだけ青ざめています。 ちよつと驚かせすぎましたね。

「大丈夫ですよ。 さすがに体を壊れそうにするほどの訓練はしないですよ……たぶん。」

「たぶん!？」

そう言うて、笑いあいました。

これからのことを考えると体を鈍らせておくわけにはいかないと考えたのか、一緒にランニングしたり、強化以外の魔法なしで軽く手合せをしたりしました。

手合せの時、お姉ちゃんはほとんど魔法の制御の訓練をしていましたが、私は素手で、お兄ちゃんは棒です。

お兄ちゃんは私に対して躊躇っていましたが、寸止めにしようとした油断をつき、投げました。

まあ、その後は真面目になったお兄ちゃんに勝ったり負けたりしましたが……

そのように数日過ごすすと、フォワードの残り二人もやってきたそうで、職員が集まり式が開かれました。

今日から機動六課が正式に稼働します。

私は式に参加せずにいつも通り仕事に精を出していましたが、お昼頃に呼び出しを受けました。訓練施設の方へ来いとのことでした。アイナさんたちに謝って、私は呼び出された場所に向かいます。一体なんですか！と内心愚痴をこぼしながらそこに向かうと、訓練施設に街ができており、なのはさんと何かの作業をしている眼鏡をかけた茶髪の女性、フォワード陣と思わしき4人がいました。なのはさんはこちらを笑みを浮かべながら見ており、お姉ちゃんとお兄ちゃんは「どうしたのかな？」という疑問を浮かべ、オレンジの髪をツインテールにした強気そうなお姉さんは訝しみ、青髪の短髪の巨乳お姉さんが私とお姉ちゃんを見比べていました。女性ばっかですね。

「なのはさん、私は仕事だったんですが、いったい何の用ですか？」

「うん、実はフォワード陣やシャーリーとの顔合わせと、一緒に訓練に参加してもらおうかと思ってね。」

「私は仕事を優先するようはやてさんをお願いしたはずですけど？」

そういうとなのはさんやお姉ちゃんたちは苦笑いを浮かべ、シャーリーと言われた女の人が作業を終えたのか私を「あの子がそうなんだ。」って感じで見ており、フォワードの残り二人が驚いていました。

「でも、これから相手する物を理解しておいて欲しかったの。お願いね。」

「ちよつと待ってください！」

「何、ティアナ？」

「一般人が何故私たちと訓練するんですか？」

「そうですよ！なのはさん、危ないですよ！」

そりゃそうですよ。普通ありえませんし、私も止められるなら止めたいです。

ああ、でもお姉ちゃんたちが戦うのに私が参加しないっていうのも・

その場はなのはさんが何とか誤魔化し、訓練を監視する場所へと移動しました。

ティアナさんの目が怖いです。めっちゃあやしんですね。

「私はティアナ・ランスターよ。何度か一緒に訓練するって言われたけど、あんたは基本戦力外として扱うから。」

「あたしはスバル・ナカジマ！ よろしくね。ティアナはあんなこと言ってるけど、本当は優しいんだよ。」

「あんたはー！」「ごめーん！」と漫才を始めたのを余所に、私も自己紹介します。

「どうも初めまして、シャロ・ル・ルシエです。見てお分かりかもしれませんがキャラの妹です。皆さんよろしくお願いします。」

よろしく、とお二人だけでなくお姉ちゃんたちにも返事を返され、訓練の準備に入りました。

私は元々仕事の後に訓練に移るつもりだったので動きやすい格好ではありますが、このような場所で本格的に訓練するには服の強度が足りません。攻撃は避けねば！

まずはフォワードだけでするそうで、私（邪魔者）は皆さんより後方にて観察します。

なのはさんたちが言うには、これから追っていく事件で度々出会うことになるガジェットドローンという機械らしく、これを破壊するのが今日の目標らしいです。

そういえば、以前聞きましたね。魔法を無効化するとか・・・
そう考えていると、準備ができたようで訓練が開始されましたって、
その説明なしですか！？

ポジションをすでに確認し合っていたのでしよう。

お兄ちゃんとスバルさんが飛び出し、ティアナさんとお姉ちゃんが
後方からの攻撃・援護に回ります。

お兄ちゃんが槍、スバルさんが右拳のデバイスで直接攻撃にかかり、
様子を見ていたティアナさんの指示でお姉ちゃんがブーストをかけ、
ティアナさんが射撃を行います。

最初の二人の攻撃は全て避けられてしまいました。

反撃にガジェットはレーザー的な物を撃っていますが、正確ではな
いのでそれほど脅威ではないでしょう。

まあ、あんな機械を相手にしたことないから拳動が分かりにくいで
すよね。

ティアナさんの射撃は相手に向かいますが、バリアーのようなもの
で魔法を防がれ、いや搔き消しましたね。

あれが噂のAMFですか。

それを機になのはさんが解説を始めます。

まずは体験しろってことですか、地味に厳しいですね。

「馬鹿スバル！ 危ない！！」

「AMFを全開にされると・・・」

何事かと思えば、スバルさんが魔法陣を道のように展開し、その上
を駆けていました。

あ、足場が不安定になって・・・ビルに突っ込みましたね。

『飛翔や足場作り、移動系魔法の運用も困難になる。』

もつと早く教えてあげてください！

なのはさんは対処法はあると言い、素早く対処しろといって話を終えました。

正直、私がするとすると、召喚しか手はないんですけどね。

強化して石を投げて壊れるかわかりませんし・・・はあ、最悪。

それから、ティアナさんとお姉ちゃんが試したいことがあると確認を取り合い、スバルさんとお兄ちゃんに足止めを指示しました。それからはお兄ちゃんがガジェットの上の道路を壊して押しつぶしたり、馬乗りになったスバルさんが力技で押し込んだり、お姉ちゃんとフリードの炎と鎖のコンボで内部をいかれさせたり、ティアナさんが多重の外殻をかぶせた弾丸で打ち抜いたりして終了となりました。

皆さんは初めて戦う相手で手間取りましたが、得るものは得たようで、いい顔をしています。

『うん、まだまだ荒いけど、皆よくできてたよ。ご苦労様。それじゃ今度はシャロちゃん、行ってみようか。』

疑問じゃないんですね・・・

「あの、なのはさん？ 私だとあれしか手がないんですけど？」

「あれって何？ というか、あんたって何ができるの？」

「あ、そういえば聞いて無かったよね？ やっぱりキャロみたいに戦うの？」

「・・・あ、あはははは・・・」

その言葉に私だけでなく、知っているお姉ちゃんとお兄ちゃんも苦

笑します。

そんな態度を疑問に思った二人、いや、画面の向こうからもシャーリーさんが名の破産に聞いています。

『そういえば、なのはさん？ 私、シャロちゃんデバイスを持っているとか聞いてないんですけど？』

『うーん、それがシャロちゃんってデバイスを持ってないらしいんだよね？』

「『『ええ〜！？』』」

それが聞こえてきたため、スバルさんティアナさんも驚いています。

『なのはさん！？ 危ないですよ！』

「ちよつと、あんた大丈夫なの！？」

「そうだよ！ デバイスもないなんて危険すぎるよ！」

「あゝ、一応できないこともないんですが・・・」

「何？ あんたデバイス無しで魔法使えるの？」

おつと、勘違いされた上に、ティアナさんが怖いです。スバルさんはそんな目を輝かせて信じないでください。私が怯えていると、

「あの、違います！ シャロはデバイスどころか魔法の才能がほとんどありません！」

「じゃあなんでこのちびっこは訓練に参加してんのよ！」

お姉ちゃん、フォローどころか悪化したように思います。

でも、ティアナさんのご意見は御尤もです。

画面の向こうではなんとか落ち着いたのかなのはさんが話しかけてきました。

『シャロはレアスキルを持っていてね、それで戦うんだよ。』

勝手に人を戦闘員に分類にしないでください！

私はただの雇われものですよ、寮の管理のための。

「（ボソツ）あんたもなのね・・・」

「すごいね！　どんなレアスキルなの？」

あれ？　なんかティアナさん俯いていや～な雰囲気だして近寄りがたいです。

ため息を吐いてお姉ちゃんとお兄ちゃんを見れば、頑張れつと応援され少し元気ができました。

「はあ、わかりました。これからお見せします。　なのはさん、それでいいんですよね？」

『うん、お願い。　じゃあ、三体でいつてみよう。　やれる？』

「オーケーです、高町教官。　どうせやるのは私じゃないですし・・・」

そう言つて私は皆さんから離れた位置に移動します。

後ろでお兄ちゃんとお姉ちゃんが一生懸命話してくれて助かります。

『それじゃあ行くね？　シャーリーお願い。』

『でも「大丈夫ですよ」。・・・わかりました。』

そして、先程と同じガジェットが三体出てきました。

どうやら、なのはさんはギラティナを見たいようですが、私にそんなのは関係ありません。

「はいはい、やりますよー。」

そうしてギラティナに呼びかけます。
さっきのフォワードの訓練中にたたき起こしたんで不機嫌そうですね。

「そっちに引きずり込んでやつちゃってくださいね。終わった
らこっちに戻します。」

「ギララギイ……（自分とはいえ美少女じゃなかったら殴って
たぜ……）」

「（ごめん、お願い。）……召喚、飲み込め。」

普段押さえてる魔力を解放し、ギラティナのいる世界とこの世界を
つなげ、呼びかけます。私の能力がガジェットたちの下で発動し、
歪みが発生します。

そして、急にガジェットたちが歪みに引きずり込まれ辺りは静か
になりました。

『シャロ……、さっきのは何？』

「向こうの世界に引きずり込んで壊してもらっています。」

『召喚能力だね？ 何で呼ばなかったの？』

「まあ、ギラティナの都合上やむなくです。」

「ギラー（終わったー）」

「了解、ありがとう。また、何かあったらよろしく。」

「……召喚。」

そして今度は私の前の空中に歪みをつくり、ガジェットの残骸を放
り出してもらいました。

なのはさんの方を向くと、不満気な表情を浮かべていました。

「これでいいんですね？ というか、これしかできませんが？」

『わかった、それでいいよ。　フォワード集合！　次の訓練に移るよ！』

なんとか誤魔化さしてくれましたね。　後ろにいるティアナさんも怖いし・・・

うう、何で私がこんな目に・・・

こんなことならはやてさんの要請を完全拒否しとけばよかったです。　ああ、予言の敵が早くしっゲフンゲフン・・・捕まればいいのに。

召喚士は逃げられない その4（後書き）

ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3247y/>

ある男の転生物語 （ネタ）

2011年11月16日02時12分発行